広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ニコス・カザンザキス「日本中国旅行記」より（二）
Author(s)	藤下，幸子
Citation	プロピレア , 25 : 109 - 123
Issue Date	2019-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048251
Right	Copyright (c) 2019 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

翻訳

ニコス・カザンザキス「日本中国旅行記」[一]より（二）

現代ギリシア語教室エリニカ講師
藤下　幸子　訳

奈良

我々の魂を養うことができる偉大なる魂。我々の心を広げ、ギリシア・ローマの地方的ないざこざやヘブライの偏狭で狂信的なエホバだけではなく、はるか遠く離れた他の全ての人々の生き方をも受け入れることができる偉大なる魂。

今日、大阪から日本の昔の中心地、奈良に旅をしているが、浅黒く黄色い猿のような外見の秀吉の体の中の偉大な魂が、私の心から離れない。豊かで矛盾した多面的な彼の心は、人間の最上の手本であると思える。快楽を好み母を崇拝し息子を溺愛すると同時に、戦においては峻烈な、平和な時には精力的な行動を取る。臨終の時に手にした筆は生涯の成果を詩に顕す。《夢のまた夢》[二]と。精力的に人生を切り開く、と同時に全てが夢であり露であると自覚していた。これこそが、人が達しうる最高の頂であろう。

列車の窓から眺めている。春らしい田畑の上を心がひらひらと飛びまわるがまま、遠くの英雄たちのことを考えている。人類が新しくより広範なルネッサンスを知る時がやって来た。かつてギリシアや美の女神たちの姿を知って、心は広がった。その後、エジプトやインドについても幾分か知った。我々の知性と心の範囲を広げて、中国と日本を含める時が来た。

土に還る前に、あちこち旅をして廻り略奪することは、知的な海賊行為であり、視覚的な喜びである。日本人同行者たちを見廻す。陽気な民族、入浴した清潔な体、象牙細工のような繊細な姿。吊り上がった切れ長の目。純真な気高さ、多くの苦難にも関わらず愛情深く生きた民族。その生来

の礼儀正しさは、様式化された伝統となった。私は飽きもせずに彼らが挨拶するのを眺めている。深々とお辞儀をした顔つきには宗教儀式の厳かさがあった。叫んだり罵りあったりしないので、私はまだ日本人同士が口論しているのに出くわしたことがない。

大阪の橋の上で、自転車に乗った人がぶつかり合い、二人とも石畳に転がり落ちたのを目撃した。口論するのを期待して、立ち止まって待った。彼らは素早く立ち上がり、埃を払い、鳥打帽を脱いで無言で挨拶をし、また自転車に乗った。大きな衣類の包みを担いで田舎からやって来た人が、ある停留所で満員の路面電車に乗ろうとした。運転手は気の毒そうな様子で彼にそっと何かを言った。包みを担いだ人はお辞儀をして、路面電車のステップに掛けていた足を降ろした。日本は人で溢れかえっている。もし礼儀正しさが欠けていたら、社会的に共存するのは堪え難いことであっただろう。優しい言葉、優しい振る舞いは、小さな船が衝撃を和らげるために船縁に付けている緩衝材のようなものである。

奈良に近づいていた。西暦七一〇年から七八〇年まで日本最初の安定した首都であった聖なる都市に。有名な仏教の寺院やブッダの大きな像、千頭もの鹿がいる、世界で類まれな公園を間もなく見るのだと思うと、心臓は激しく鼓動していた。これから見るものが想像よりもはるかに優れているだろうことは、いつものことで分かっていた。それで、巨大化したサボテンのような異国的な塔を初めて遠くに見分けることができないかと、窓から身を乗り出した。

静かな優しい景色だ。なだらかな山は穏やかな光に満ち溢れている。真っ白な薄雲が空に漂っている。足の長いコウノトリが二羽、黒い木造の粗末な家の上を彼方へ飛んで行った。突然、奇跡が起きた。これらの粗末な家の間に、雨で黒くなった屋根の上に、優しくぼんやりとした空気の中に、初々しく誇らしげに豊かに光り輝いて、楽しげに咲き誇る、薔薇色の光の噴水のような満開の桜が突然目に飛び込んだ。サクラだ！

その桜を見た時、私の記憶に突然甦った。遠くの北の街ウルム[三]の黄昏時、多くの聖人の彫像で飾

られた中世の大聖堂に向かい合ったことが。この大聖堂もまた同じように、貧しい家々の間から急に立ち上がり、屋根の上で輝きと豊かさに満ち溢れ、天に届こうとしていた。桜も大聖堂も、周りの貧しさ全てを途方もない豊かさに、そして、人と空気の暗さ全てを光に変えているかのようであった。女たちは小川で屈んで洗濯をし、赤ん坊は泣き、男たちは畑で腰を曲げて働いていた。誰も桜を見ていなかった。しかし桜は、咲くという、物質の持つ最高の任務を果たしていたので、村の暗い地域一帯を浄めつつ、静かに満足げに彼らの上にどっしりと立っていた。

藤は無垢な喜びの象徴である。菊は忍耐と不死の、蓮は泥から汚(けが)れることなく伸びあがるので美徳の。それに対して桜の花はサムライの象徴である。しっかりとした枝にくっついていて、萎れる前に地上に落ちて死ぬので。同じようにサムライも恥をさらす前に死ぬ。だから武士は戦に赴く時、兜に一本の花盛りの桜の枝をしっかりと付けたものだった。

車窓から手を振って、去りゆく桜に別れを告げる。今を去る九百年前のある日、僧行尊も同じようにこの桜を見て、手を差し伸べ、お願いしたであろう。**《満開の桜よ、愛し合おう。この世の中で私の知己はお前の他にはないのだから》**[四]

奈良は、日本のメッカ、聖なる中心地である。昔の大富豪のとても美しい貴婦人は、今では大きな田舎である。王侯貴族は奈良を去り、船は焼け落ち、寡婦になった。全ての指は抜け落ちたが、指輪は残った。奈良の神々、日本人の偉大な先祖である太陽神を頂点とする神道の八百万の神々は残った。魅力的で穏やかな笑顔のブッダも残り、薄暗い木造の寺の中で胡坐をかいて、思いやりのある皮肉さで信者たちを迎え入れる。

列車から飛び降りた時、驚いて立ち止まった。祈念行列の男たちと女たちが小太鼓を持ち、旗を掲げ、奈良に向かう坂を上って行った。列車や車や荷車でやって来る群衆もあれば、徒歩で来る巡礼者たちもいる。私は片隅に立って、行き来する蟻のような群衆の色や音を楽しんだ。日本中から、老いも若きも、百歳の老女たちもやって来て、彷徨っている。中世にキリスト教徒が聖地から聖地

へと巡礼をしたように。黄色や橙色や緑色の旗や、小太鼓や、長い笛を持って、腰帯には皮や絹の煙草入れと、三口以上の煙草は詰められないほど小さな雁首のついたキセルを通している。

「今日は《花まつり》です」駅長は深々とお辞儀をして私に説明した。

参詣者たちは、花や文字の刺繍や印刷が施された白い手拭いを頭に巻いていた。それらは有名なハナミテヌグ、花々の手拭いで、春に身に着け、満開の桜を拝みに行く。偶像崇拝の喜び、春の和やかな雰囲気、笑い声と話し声。カッコウが一羽、松の木から飛び立って、鳴いて奈良の方へ飛んで行った。彼もまた巡礼者でブッダの足元に座るために。

カッコウの後を追って、私もようやく動こうとした瞬間、修行僧ビクの徒歩大隊がやって来た。ひさしの広いドーム状の麦わら帽子と長い黄色い僧衣を着て、肩の上にまで達する長い杖と小さな鈴を持ち、裸足で歩いている。黙って、むっつりと、目を伏せて奈良への道を辿っている。この黄色い修行僧たちは、満開の桜の花の下に、一体何を捜し求めるのか。あるいは、桜の花がどんなに急いで散っていくのか眺めるためなのか。そうやって、人生の虚しさの新たな光景を見付けるためなのか。九百年前の日本人、小野小町が詠っている《**ああ桜よ、お前は人生に何と似ていることか。お前が咲くのを見た瞬間、既に散っている**》[五]

真実だけど人生の惨めな概念、あるいは、理解し難い神秘の唯一の側面、儚い一瞬が永遠と質的に等しくなりえることを正しく評価しない宗教。《**満開の桜を見るために、盲目の子がお母さんの手を掴んでやって来る**》と歌われている。長い杖を持ち、目を伏せて坂を上って行く修行僧たちが、盲目の集団のように、一瞬思われた。

痩せた上半身裸の肉体労働者が曳いているリクシャを呼んだ。

「ドオ、どこ？」優しく探るような目で私を見ながら、この馬人間は尋ねた。

「リョカン」私の僅かな日本語で答えた。「ソロリソロリ、ゆっくり、ゆっくり」

笑いながら歌いながら一緒に坂を上って行く多彩な巡礼者たちの光景を私は飽きもせず眺めてい

た。陽気な日本人が人間の体臭や花や色で満たし得た暗い宗教を。古代ギリシアの我々の花祭り[六]は、苦しみのヘブライの宗教が毟り取ったが、ここ、世界の果てで、まだ咲いている。

春には、山車を花で飾り、牛に花輪を吊るし、逞しい若者や美しい日本の女性たちが山車に乗って、ゲイシャに挨拶に行く。踊り、歌い、サケを呑み、日々の悩みを忘れる。すると人生は太古のうっとりするような本来の姿を取り戻す。水は再びブドウ酒となる。ディオニュソスは、ギリシアを捨て去り、この遠い浜辺に避難した。今や着物を着て、手には満開の桜の枝のテュルソス[七]を持って。老人と男と子供たちの三つの偉大なコロスが甦る。こうして民族は木と共に花咲き、やがて死すべき命が、この地上で再び不死の意味を持つ。

「イラサイマセ！　イラサイマセ！　いらっしゃいませ！　いらっしゃいませ！」

リョカンから経営者夫妻と娘二人、太っちょの女中が出てきて、地面に届く程頭を下げて私に挨拶をした。リクシャから飛び降り、私も地面に着くほど三回お辞儀をして挨拶を始めた。それから、お辞儀で紅潮した顔で、部屋があるかと尋ねた。

「お出でいただきまして恐悦至極に存じます。私どものような粗末な旅館には、身に余る光栄でございます。閣下はお腰の低いお方で……。ありがとうございます」

これは簡単に言うと「部屋はあります」ということである。

きれいに洗われた、ごく小さな中庭に、満開のつつじが二、三鉢置かれていた。そして庭の真ん中の小さな鉢には奇跡があった。高さは四十センチにも満たず、太い幹は男性の腕のような小人の桜が花をいっぱい付けている。ここ何日かこの庭の一番良い場所に上げられている。まるで本物の偉大なる殉教者で、聖人の日を祝っているようだ。中庭の周りに部屋があった。私は靴を脱ぎ、階段のところにずらりと並んでいるたくさんのスリッパの一対を履いて、畳敷きの縁側に上がった。

想像を絶する家の清潔さ。これが、日本の最大の魅力の一つである。床も壁も戸口もみんなピカピカ輝いている。私の部屋は畳敷きで、真ん中には低い小さな机、その上に三本の花の入った花瓶、

畳には座布団が、壁には一本の花ざかりの木が描かれた絵があった。それが私の心を幸せで一杯にした。私好みの飾り気のない偶像崇拝の楽しい部屋である。

座布団に胡坐をかいて座る。簡素な襖の壁が開けられ、私は通りを見下ろす。小さな磁器の湯飲みと一緒に急須が持ってこられ、小皿には皮を剥いたピーナッツが少し乗っている。茶を少しずつ啜るように飲み、ピーナッツをむしゃむしゃ食べる。私は幸せだ。丸々太った女中が菫色のキモノと一足の深紅の下駄を持って来てくれる。そしてお辞儀をして私に言う。

「フロ！（風呂！）」

風呂は沸いている。日本人が普段入るような火傷しそうな熱さ。大きな桶が地中に半分埋められている。中に入り、この上もない幸せを感じる。キモノを着て深紅色の下駄を履き部屋に戻る。また茶を飲んで、開いた襖から、太鼓を叩きながら登って行く参詣者たちを眺める。木や石やブロンズで造られ、微笑みを浮かべたブッダが安置されている極めて古い寺を、遥か遠く、木々の間に想像する。それらを急いで見に行こうとは思わない。じれったさ、苛立ち、はやる心に打克って、過ごすこの聖なる素朴な瞬間を一刻一刻楽しんでいる。そして思う、《幸せよ、お前は何と素朴な日々の奇跡であることか。水のようで、我々はそのことに気づかない》

千二百ヘクタールある日本最大の公園。松、樅、ポプラ、柳などの極めて古い木々。湖には、白いヒレのある赤い異国風の魚が踊り子ように、ヴェールを広げたり縮めたりして遊んでいる。鳩とコウノトリと白鳥。とりわけ、無類の喜びは、貴公子のように可愛らしく澄まして行ったり来たりしている千頭以上の鹿である。人を見ると恐れず誇らしげに近づいて、長い睫毛に覆われたビロードのような目で人々を見つめる。毎年十月、その角を根元で切る大祭がある。今でも頭を撫でると、角の根元に血がにじんでいるが見える。

今にも飛び立とうとしている鳥のように、各層が僅かに反り返っている塔が、木々の間に聳えている。トリイ、大文字のΠの形をした聖なる門が、

光り溢れる緑の木々の中で深い紅色に輝いている。鳥居はシントウという宗教の聖なる門、すなわち、《神の門》という意味である。救われたいと望む者は、誰しもこの門から入らなければならない。

先祖の宗教であるシントウは、日本人たちの原始の宗教であった。家族の先祖を、後に、民族の先祖を、最後に、社会共通の父である天皇の先祖を崇拝していた。死者は生きており、生者を支配すると信じていた。親は亡くなってカミという霊となり、絶えず子孫に接触して喜びや悲しみを分かち合い、生きている人たちを助けたり、励ましたり、罰したり、復讐したりする。空気は死者の霊で満ちている。霊は波や風や炎に住み、働きかける。全ての先祖は、良い者も悪い者も、有能な者も無能な者も神となる。良い神も悪い神も生きていた時に持っていた特質が巨大化されている。もし、成功したいなら、生きている者は、祈りや供え物や踊りや歌で良き先祖の神々を喜ばせ、悪い神々は宥めなければならない。

このように全ての日本人は、頂にいる天皇も神々を起源としている。それで今日においてもなお日本民族は自分たちが世界のどの民族よりも優れており、自分たちの国を神の国だと誇らしげに考えている。これらすべての神々の中で最も偉大な神は、太陽神アマテラスで、皇室の根幹である。他の有力な神々は風や海や川や火や山々であり、多くの有名な戦士や王たちも同様である。シントウの神は八百万いる。それぞれの技術には、その仕事に応じた道具を持った守護神がいる。鍛冶屋、建具屋、大工、漁師たちは、それぞれ自分の神を持っており、息子が父親の技術を学び始めるのは宗教的なことで、盛大で神聖な儀式が執り行われていた。若い見習いを神の加護の下に置くために、守護神を宥めすかさなければならなかった。

多くの面を持つ神々は、厳しく恐ろしいだけではなく、しばしば陽気で滑稽で、大きなお腹をした者は、数珠や湯のみや酒を持って、大笑いしている。それらを見ている信者や、儀式を執り行う神官たちも大笑いしている。神々は怒らないばかりか、彼らの子供たちを笑せるのを楽しんでさえいる。そんな風に神の概念は人間的である。神は家族や知人となり、日本人たちは、神に近づく。

飼いならされた大きな象に、我々が近づくように。
服従、供え物、祈り、これが神道の三つの根本的な掟である。「天皇に従え、なぜなら最高神、太陽神に起源があるから。先祖神に供えものをせよ」最初は墓や祭壇に本物の飲み物や食べ物、着る物を供えていたが、後になって、酒や、食べ物や、着る物が印された紙を木に巻きつけ、供えるようになった。「最後に、体を水と塩で洗い、祈祷と断食で心を浄めた後に、先祖たちに祈れ」と。
あらゆる自然の力に、木々に、動物に、生者であれ、死者であれ、全ての人間に、至るところに、日本全体を解きほぐすことができない集合体として結びつけている秘密の絆が広がっている。最近でも、ある日本の政治家がこの古い信仰を強調して表現していた。「我々が持てる物すべては、先祖の霊のおかげである。我々は先祖神のためにのみ生きている。先祖神のみが我々を生かしてくれている。どんなに大きかろうと、先祖のためにしてはならない供え物はない！」一九〇五年に日露戦争が勃発した時に、将軍たちは驚くべき日々の命令を兵士たちに与えた。「先祖のために、死に損なうことなく、必ず死んで来い。先祖の魂は、お前たちと共にあり、お前たちを取り囲み護っている」
誇り高いこの神道の義務感が日本人の上にどれほど大きな影響をかつて与え、今も与えているかを深く理解しなければ、日本人の心を理解できない。この影響を深く感じる時、初めてそれぞれの日本人の悪魔的な強さの源がどこにあるか分かるだろう。なぜこのように死を軽視し、全ての者が祖国のために死ぬことを不思議な高揚を持って受け入れるかを理解することが出来るだろう。祖国、ミカド、神々、先祖、そして子孫、これらは日本人にとって、分かつことのできない不死の力である。死んで民族全体と一体となり、不死になると信じている時、どうして人は死を恐れるだろうか。
公園の中の神社の赤い門をくぐっていた時、もし白人の我々が大きな信仰を持っていたら、どんなに大きな力を持っていただろうかと考えると、身震いした。我々は今、仕事もなく、知識だけ持って微笑んでいるか、あるいは一貫性もなく希望もなく支離滅裂になって、個人主義の地獄の中で猛り狂って徘徊しているかである。日本人は、恐

らく虚構を信じているのだろうが、実りの多い実質的な大きな結果に到達している。我々は、何も信じず、惨めに生きて、永遠に死ぬ。

公園の中で私の心は千々に乱れ、奈良の町の中に入って行く。有名な奈良人形を売る商店。驚く程みずみずしく活き活きしている人形。ボタンやパイプや神の小さな像や奈良公園の鹿の角で作った杖を売っている店もある。修行僧たちは、戸口から戸口へゆっくりと歩いて行く。手に杖を持ち、じっと下を向いて祈りを唱え始める。時折、執拗に単調に小さな鐘を鳴らし続ける。家の人が、うんざりして戸を開け、片手をぬっと出して頭陀袋に一つかみの米を入れるまで。

十二世紀前にこの地に花開いた繊細で宗教的かつ官能的な文化のことに思いを馳せる。ヨーロッパ全体が暗黒時代だった頃、ここでは貴族や皇族たちが磁器の器で米の飯を食べ、金の盥で体を洗い、造園や生け花を芸術の域にまで高めた。技術者たちは素晴らしい像を彫った。その幾つかは今も残っていて、我々を感動させる。

日本の青い鳥、日本の魂は、今はもう奈良を去り、別の旋律を歌いながら別の翼で大阪の煙突や東京の摩天楼に飛んで行って止まった。巣がいくつか見捨てられ残っているだけ。世界で最も大きなブロンズの像ダイブツすなわち大きなブッダを納めた大きな寺院に立ち寄った。蓮の花の上に胡坐をかいて座っている。高さ五三フィート、鼻の幅三フィート、一番長い指は四フィート半の長さがある。この巨像を鋳造するには、銅が四三八トン、白蝋が八トン、金が八七〇ポンド、水銀が四八八五ポンド必要だった。奈良の最盛期の七五二年に鋳造された。それというのも、ペストが流行って何千もの人々の命を奪ったから。民衆は恐れ、狂信者たちは、新しい神ブッダがこの国に持ち込まれたので、偉大な女神アマテラスが怒ったのだと叫んだ。天皇も怯え、大きな像を鋳造することを命じた。こうしてブッダ化したアマテラスのこの像が生まれた。二つの宗教を、巨大なこのエルモアフロディーティ一つに、即ち、この上もなく優しく且つ力強い姿に統合するという大胆な合成に成功した。

ドラゴンの組んだ足の周りを長時間蟻のように

回った。穏やかな姿、河のように幅広い微笑み、二つの丸い山頂のある広い胸を見ている。小人の参拝者たちが波のように相次いでやって来て、手を三回打ち、ブッダを招来する。銅鑼がリズミカルに響く。寺の入り口の大きな鍋に線香が燃え、濃い煙が立ち籠めている。抜け目のない僧侶たち、ある者は肥えた豚、またある者はやせ細った狐のようなのが、台に座って魔除けや祈祷文が書かれた紙の巻物、紙やブリキやビロードのお守りを売っている。石や木や鹿の角や象牙やらの非常に小さなブッダの像も売っている。僧侶たちは汗びっしょりになって小銭を集めている。彼らの上にはブッダがいる。頭は、天井に触れんばかりで、僧侶たちを見つめて微笑んでいる。うっとりとして手を合わせている民衆を見つめ、微笑んでいる。ブッダは、すべては虚構で、感覚の幻影であることを知っている。信仰している人々も、拝まれている神も、お金を貯めこんでいる、細かったり、太かったりしている僧侶たちもいないことを。そよ風が吹くと、全てのものが消え失せて行くことを。

その像を見ていると、立ち去る気にはならなかった。その像の美しさに魅了されたのではない。技術は雑で、性急で、巧くはなかった。しかしこの像は、土着と外来の二つの偉大な神をとてもしっかりと混ぜ合わせ、分かつことのできない合成物として造られているので、計り知れない意味合いを持っている。外国から取り入れたものは何でも変質させてそれを日本風にするという日本人の魂特有の錬金術の基本的な能力が、ブロンズの像に刻みつけられている。活動を渇望して、存在と外の世界の価値を信じている日本人の魂は、六世紀の布教僧と何の関わり合いがあろうか。布教僧たちは、あらゆる行為の無益さと目に見える世界の虚しさを布教していた。「欲望を取り除いて、あなたの内を空にせよ」とブッダは説教した。「望みを強く持ち、始めたことはやり遂げよ！」と、神格化された日本人の祖先たちは叫んでいる。「三位一体の不死の現実が存在する。それは家であり、祖国であり、ミカドである！」と。

恐るべき格闘が勃発した。土着の神々は自分たちを否定し破壊していく外来の神に襲いかかり追

い出そうとした。だが、日本人の魂は、いつも何か女性的なものを持ち、外国の種に憧れ、受け入れることも切望している。次第に日本人の心の内で、取り込みと実り豊かな同化が始まった。役に立たないものは追い出し、同化され得るものだけを取り入れた。自然への愛は受け入れた。全ては一つである。植物、動物、人間、神、全ては私たちの心の根っこのところで深く繋がっている。不幸や死を前にしての克己心と平静さ、魂がどれほど苦しみに耐えていようとも、常に唇の上に、枯れることのない花咲く微笑みをも取り入れた。さらに、仏教からは所作における高貴さ、社会的な触れ合いにおける優しさ、感性の繊細さをも取り入れた。《大地に落ちた枯葉よ、寒くはないか？枯葉よ、私の懐に入れてあげよう。再び太陽が出て、雪が解けるまで。枯葉よ、私の懐で温めてあげよう！》

空は雲に覆われた。ブッダのブロンズの胸が暗くなっていくのが見て取れた。私の周りの全ての参拝者の顔は青白い光に沈んだ。吊り上がった目だけが、柔らかい暗闇の中で輝き、灯かりで満たしていた。霧雨が降り始め、大きな鈴懸の分厚い葉を強く叩いた。寺の外に出て、線香が焚かれている、大きな釜の近くにある石の腰掛に胡坐をかいて座った。静けさ、ほろ苦い甘さ、大地から立ち上る香り、梢を優しく舐めながら、光ったり消えたりしている遠くの黄色い稲妻。私は眼を半ば閉じ、心安らかに、ブッダの神聖な恩寵が私の上に降りて来て、私のこめかみや胸を舌のように舐めるのを感じた。偉大な東方の人の言葉が、静かに柔らかい苔のように登ってきて、私の心を包んだ。《全ての人々は宴会で座っているかのように、あるいは、春に塔に登っているかのようかに、幸せである。私だけは、穏やかで、幸せでも不幸せでもない。まだ微笑んだことのない子供のよう。全ての人は、財産を持っているばかりか有り余ってさえいる。私だけが貧乏で、何も持っていない。全ての人は賢くて、私だけが愚かである。波に浚われるに任せ、頭を凭せ掛けるところもない。仏様、あなたの微笑みの中に避難させてください！》

慈悲の女神

奈良は透き通ったガーゼのような霞にくるまれて目覚めた。町の目覚めは素敵だ。愛する女の目覚めのように。この町の朝の小さな秘密を見ようと、朝早く急いで通りに出た。

リョカンの太った女中は、部屋の壁である、ふすまを引き、黒い木の盆に乗せた朝食を持ってきた。

「オハヨコザイマス！　お早うございます」

私たちはお辞儀をした。私は色々な木の器の蓋を取った。耐え難い悪臭のする黄色い濃いスープ、何切れかの生魚、胡瓜と瓜の漬け物の小さな器、大きな器に入った飯。緑茶の入った急須は必須。

何を食べているのか意識して食欲が無くならないようにと、昨日の午後、奈良の有名な博物館で見た数々の素晴らしいものを思い浮かべる。素晴らしい彫刻や絹の布に描かれた絵、見事な壺。それらの多くは、遠くチベットやペルシャやビザンツからやってきた品々である。莫大な富や武器や衣装、六万の貴重な宝石の入った数々の大きな木箱。それらは、夫を失った光明皇后が八世紀に民に与えた皇室の財宝である。手書きの奉納目録が今も保存されている。《愛するご主人様の死から四十九日経ちました。しかし、日ごとに私の苦悩がより大きくなって、苦しみが私の心にますます重くのしかかってきます。大地に嘆願しても、空に叫んでも、私に安らぎは、もたらされません。そこで、敬愛するあの方の魂に喜びをもたらすために、善行を施すことを決心しました。それ故、これらの宝を御仏に贈ります。天皇の魂がやすらぎを見出だせますように。この贈り物があの方の魂の救済に役立ち、あの方の魂が乗った車が聖なる蓮の世界により早く着いてくれますように。私の主人が、彼岸で天の音楽を楽しみ、光り輝く御仏の極楽浄土に受け入れられますように》

今より十二世紀前に、一人の女性が溜息をつきながら語ったこの愛の言葉を、私は何度も繰り返し思いだし、それで、今食べている日本食のなんたるかを忘れ、満腹して通りに降りて行った。公園にはひと気がなく、ただ鹿たちだけが一瞬頭を上げ、利口そうな大きな目で私が急いで通り過ぎるのを見ていた。私は小さな電車に乗って法隆寺

に行こうと急いでいた。奈良から一時間の小さな村で、そこにはブッダの最古の寺がある。日本美術の最高傑作である慈悲の女神、カンノン[八]を見たくて堪らない。それが、そこの尼寺にある。

尼寺の中庭は、石畳がきれいに洗われ、赤や黄色の花の鉢が並んでいる。優しさと静けさ。私は入り口で、思わず足を止めた。この中庭の通路での時が、何時間も何月も何年も続くことを願うかのように。黒い斑点入りのオレンジ色の猫が一匹、朝の光の中で、石段の上に座って薔薇色の舌で体を舐めている。繊細な女性の詠唱する声が、庭の後ろの方から聞こえたような気がする。

いつか、シケリアノス[九]と一緒にスペチェス島の尼僧院に行ったことを思い出す。中庭がこんな感じだった。何鉢もの赤い花が、上に登っていくようだった。他の神――神は常に同じだが――を讃える女性たちの、とても優しい声が聞こえていた。二人とも心が震えて、入り口で立ち止まった。

「この花の名は何ですか」と尋ねると、

「サルビアです！」と、修道女が答えた。

アッシジの聖クララ尼僧院の庭も、こんな感じだったと覚えている。鳩がいて、植木鉢には全てバジルが植えられていた。清らかな女性的なか細い銀のような鐘の音色が、向かいの聖フランシスコ修道院の男性的な鐘の音と混じり合っていた。男が女と交わるかのように。そして今、世界の果ての同じような中庭で、同じような女性的な声、同じような飽くことのない心の昂ぶりが。

小さな戸が開いて、ぽっちゃりとした年端もいかない尼僧が笑顔で現れた。にこにこしながら私を見たが、黙っていた。

「カンノン女神を見たい」と私は言った。

尼僧は唇に指を当てた。

「大声を出さないでください。お祈りをしていますので」

オレンジ色の猫のそばに座って待つようにと、石の腰掛を指さした。

座って待った。庭の向かいの隅に、一本の背の低い桜が咲いていた。桜から蜜を集めている蜜蜂の羽音が聞こえていた。女性たちの穏やかな詠唱が蜂の羽音と交わった時、ふと、ブッダが背の高い満開の桜の木で、女性たちが、その花の蜜を集

めている蜜蜂のように思えた。
　どれだけ長く待ったのか分からない。時間のリズムが変わった。時間と秒が同じ翼で私の上を通ったのは確かだった。突然、幼い尼僧がまた現れ、私を手招きした。詠唱はもう終わっていた。小さな御堂には誰もいなかった。私たちは拭かれたばかりの古びた階段に着き、素足になって上がった。上がって行く時、私の体は喜びを感じた。私の足の裏が、全ての女たちの素足の足の裏と交わったかのように感じて。女たちの足の裏は、この非常に古びた艶やかな板に、何世紀ものあいだ触れてきたのだ……。
　とても清潔な部屋。床には白い座布団。二つの大きな皿。一つは花、もう一つは果物で満たされている。奥の方には、どっしりとした絹の幕。
「カンノンはどこですか？」心配になって尋ねた。
　幼い尼僧はにっこり笑って、裸足で走って行き、両手を上げて幕を開けた。カンノン女神は馨しい暗がりの中で輝いていた。左の膝に右の足を乗せて座っている。左の手は、右の足裏に触れ、右の手の二本の指は引き締まった若々しい顎の先に触れている。小さな可愛らしい高貴な令嬢。ふっくらした艶やかな唇。あどけなく、優しさに満ちた吊り上がった目。この女神は、憐れみ深く積極的に痛みを治す女神ではない、と感じる。不幸な人たちの元に慰めには行かない。御座に動かず座ったまま、人の心を癒す女神である。存在するだけで、彼女を見るだけで、痛みを忘れるのに十分である。
　大きな仏の耳でしっかりと聞いているかのように、微かに身を屈めている。人の痛みを遥か遠くで感じているかのように。ブッダの娘は微笑んでいる。何故なら、痛みも、偽りであって、儚い夢であるということ、そして目が覚めると夢は霧散するということを知っているから。あなたも霧散するし、全ての世界も、あなたと共に霧散することを。ブッダのお陰で苦痛は打ち負かされるだろう。だからこの若い慈悲の女神は、これほど落ち着いて微笑んでいる。だから御座から動かず、手も差し伸べない。勝利を確信している。どんな勝利を？　消滅を。
　私の心は、これほど気位の高い、不動で確かな

慈悲の女神を創りだしたことはなかった。なぜなら私の心は、ブッダの黄色い僧衣にすっぽり包まれたいと願ったことはなかったから。すっかり絶望した者だけが、このような高慢な救済の女神を想像することができるのだろう。彼女をうっとりと眺め、それを彫った奇跡を起こす手を称賛した。それは、日本におけるビザンツ帝国のコンスタンティノス大帝である聖徳太子の作品であると言われている。彼は聖人であると同時に、偉大な法律制定者、軍人、詩人そして彫刻家でもあった。絹布に描かれた彼の肖像画は、今なお保存されている。優しくて、立派で、激しい表情。この女神、この高貴な令嬢は、まさしく彼に似ている。

また私の上で、時が静止した。何時間、このつんと澄ました慈悲の女神を見ていたか分からない。立ち上がって帰ろうとした時、幼い尼僧が腕を枕に、床で居眠りしていたことだけを覚えている。

【註】

一 カザンザキスの日本・中国旅行は一九三五年。本訳は Νίκου Καζαντζάκη,Ταξιδεύοντας Ιαπωνία-Κίνα,Αθήνα 1969, Εκδόσεις Ελ.Καζαντζάκη を底本とし、その中の「奈良」「慈悲の女神」の項を翻訳したものである。

二 豊臣秀吉自筆辞世和歌詠草

《つゆとをち つゆときへにし わかみかな
なにわの事も ゆめの又ゆめ》

三 ドイツの街。大聖堂はゴシック建築で世界一高い教会。

四 前大僧正行（金葉和歌集雑五二一）

《もろともに あはれと思へ 山桜
花よりほかに 知る人もなし》

五 小野小町 『古今集』春・一一三

《花の色は うつりにけりな いたづらに
わが身世にふる ながめせしまに》

六 花祭り（ανθεστήρια）は古代ギリシアにおいて、豊穣とブドウ酒の神であるディオニュソスを讃えて、毎年春の始めに催されていた。今でも花祭りをしている地方がある。

七 ウイキョウの茎にブドウやキズタなどの植物をあしらい、先端に松かさをつけた杖。ディオニュソスとその信者が持つ。

八 中宮寺の本尊、国宝半跏思惟像（伝如意輪観音像）。

九 ギリシアを代表する詩人（一八八四―一九五一）。

（協力：現代ギリシア語教室エリニカ有志）